

保存科学の国際活動

文化財の国際交流の場が広がるなかで、当研究所の保存科学研究は海外からも評価を受け、その活動も一層活発となっている。

まず平成2・3年度で、当研究所と韓国との間で国際学術研究「日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究」を行った。研究の目的は、日韓で出土する遺物の材質調査とその保存法の開発の比較研究である。主な研究テーマは、①北海道江差沖の沈没船開陽丸、韓国的新安沖の貿易船の両者を中心に船体の保存方法の比較研究、②漆製品の材質比較調査、③金属製品の保存法、特に脱塩法の効果に関する比較研究の3点である。最終年度の平成4年1月、韓国ソウルで関係者150人の参加を得て開催した発表会では、上記テーマに加えて日本側から遺物・遺構の保存に関連する研究分野として、遺跡探査法と遺物の写真測量に関する研究成果も報告した。以上には工楽善通・伊東太作・西村 康・肥塚隆保・村上 隆・沢田正昭が参加した。

次に平成元年度から平成3年度にかけて、文化庁とアメリカ・スミソニアン研究機構との共同・国際学術研究「東アジア地域の古文化財の保存科学的研究」が行われた。当研究所も研究分担しており、①東アジア文化財その原料についての鉛同位体分析のデータベース作成、②ブロンズ病と青銅腐食のメカニズム、③古代東アジア青銅器における鍍金、④中国製・朝鮮半島製・日本製青銅器の鋳型作成・鋳型技術・冶金学的問題、⑤縄文土器の技法・組成の研究をおこなった。なお、この共同研究は3年計画で実施したもので、平成4年度からさらに新しいテーマ「科学技術を利用した文化財研究法」で共同研究を継続することになっている。この研究の分担者は佐原 真・西村 康・肥塚隆保・岩永省三・村上 隆・沢田正昭である。

また、村上研究員は国際交流基金の助成によりワシントンスミソニアン研究機構とボストン美術館の客員研究員としてアメリカ合衆国に滞在した。研究テーマは、「東西文化における古代金工技法の比較研究」である。アメリカでは、ギリシャ・ローマをはじめとし、中近東からタイや中国に至る東南アジア諸地域の古代金属の材質と製作技法に関する情報が蓄積されてきている。また、日本では馴染みの少ない中南米地域に関する研究も盛んである。今回の滞米中に多くの美術館・博物館、大学を訪れ、これらの研究に携わる研究者たちとディスカッションし、交流を深めることができたことは、大変意義深いことであった。スミソニアン研究機構では、特にフリアー美術館において、トム・チェイス保存科学部長のもと、古代中国青銅器の科学的調査を実地に行うことができた。また、滋賀県雪野山古墳出土の「辛出銘三角縁四神四獸鏡」と同型鏡とみられるフリアー美術館所蔵の日本出土鏡の調査を行えたことも今回の大きな収穫であった。(沢田正昭・肥塚隆保・村上 隆)

フリアー美術館における鏡の研究